「教育臨床総合研究18　2019研究」

衣生活の関心の程度による衣生活観・衣生活行動の性差

Sex Differences in Clothing Life Behavior and View of Clothing Life Depending on the Degree of Interest in Clothing Life

多々納　道　子*　　鎌　野　育　代**
Michiko TATANO　　Ikuyo KAMANO
平　井　早　苗**
Sanae HIRAI

要　旨

衣生活の学びをより効果的に高めるには，生徒の興味・関心の程度が鍵になる。そこで，学習者の関心に焦点をあて，衣生活の関心の程度と衣生活観や衣生活行動に見られる性差との関わりを明らかにした。その結果，衣生活に関心のある者でも，男子よりも女子の方が衣生活の営み方に明確な考えを持ち積極的に衣生活行動をとる者が多く見られた。従って，関心の程度を見極め，主体的に学べるよう学習内容や方法を工夫することが必要になることを明らかにした。

〔キーワード〕　衣生活の関心，衣生活観，衣生活行動，衣生活の学習意欲

Ⅰ　はじめに

家庭科において衣生活管理能力の形成を目指す日々の授業で，生徒の知識・理解の質を高め，資質・能力を育むには，「主体的・対話的で深い学び」が求められる。このアクティブ・ラーニングによる学習成果の達成には，生徒自らが学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど，興味・関心を生かした学習を工夫することが不可欠である[1) 2) 3)]。ここで学びを推進する鍵になるのは興味・関心であり，その程度が重要になる。例えば，「高校生の衣生活管理能力形成への性差による課題」[4)] を求めた研究では，衣生活の関心は男子に比較して女子の方が総じて高い傾向にあったものの，男女とも衣生活に関心のある者の方が学習意欲は高く，学習活動において関心と意欲は関わりが強いことが明らかになっている。

櫻井茂雄[5)] は動機づけの心理学の立場から，「深い学びはおもに知的好奇心に基づく内発的な学習意欲によって生じる。対話的な学びは主に協同学習による学びとも言い換えることができ，内発的な学習意欲による興味・関心に基づく他者との交流による学びとほぼ同じで，主体

*島根大学名誉教授
**島根大学教育学部初等教育開発専攻

的な学びは自ら学ぶ意欲による学びそのものといえる。」と捉えている。すなわち，アクティブ・ラーニングは自ら学ぶ意欲に基づく学習行動であり，それを実現するための源にあるのは自ら学ぼうとする意欲であると言うことができる。そして，自ら学ぶ意欲がうまく働けば，学業成績の向上や創造性の伸長などが成果として期待できるのである。このように，学習成果を上げるには，自ら学ぶ意欲が重要であり，目標設定でもその評価においても関心・意欲・態度という情意面の項目が重視される所以である[6)]。

そこで，本稿ではまず関心に焦点をあて，衣生活の関心の程度が被服の購入，着方や手入れなどに関する考え方や行動である衣生活観や衣生活行動にどのような性差をもたらすのかを，特に性差に着目して明らかにし，衣生活の関心や学習意欲を高めるための方策を検討することを目的とした。

Ⅱ　研究方法

本研究では，「高校生の衣生活管理能力形成への性差による課題」[4)] の分析対象と同一のデータを用いることとした。すなわち，対象者は島根県内の公立高等学校２校の専門学科に在籍する男子76人と女子98人の計174人である。

衣生活の関心の程度によって生徒をグループ化するため，男女別に衣生活に関心が「大変ある」と「ややある」を合わせて「関心あり」，「あまりない」及び「全くない」を「関心なし」という２グループに分けた。そして，グループごとに衣生活行動・衣生活観や家庭における衣生活教育の状況などについて求めた。「関心あり」の男子は44人，女子は81人，「関心なし」の男子は32人，女子は15人であり，これらの者を対象に，衣生活観・衣生活行動や家庭における衣生活教育の状況について求めた。

Ⅲ　結果と考察

１．ボタンつけ

（１）衣生活の関心とボタンが取れた時の対応の仕方との関連

衣生活に「関心あり」と「関心なし」の２つのグループ別に，着用していた被服のボタンがとれた時に，どのように対応するのか男女の違いについて求めた。結果は，表１に示される通りである。

「関心あり」のグループをみると，男子は「家族など自分以外にしてもらう」が約3/4を占めて最も多く，「自分でつける」は1/5に留まった。女子では，「自分でつける」が1/2強と最も多くを占め，「家族など自分以外にしてもらう」は1/2であった。衣生活に「関心あり」と分類できるグループであっても，男子と女子の間では自分でするか，あるいは家族など自分以外の者にしてもらうかの自立性にはかなりの違いが見られた。

この「関心あり」の男女間には，χ^2検定によって１％水準で有意差があり（$\chi^2(2)=17.8, p<.01$），ボタンが取れた時に自分でボタンつけをするか否かについては，明確な差異が認められた。

次に，「関心なし」のグループにおいて，男女間にボタンつけを自分でするかどうかに差異があるかを求めた。その結果，女子の方が「自分でボタンを付ける」という割合が多く，「家

族など自分以外にしてもらう」は逆に男子の約2/3を占めた。「そのままにしておく」は男女とも10%以下とそう多くはないが，男子の方がやや多いという傾向であった。ただ，有意な差は認められなかった。また，「関心あり」と「関心なし」の男子の間，「関心あり」と「関心なし」の女子間についても同様にχ^2検定を行ったが，有意差は認められなかった。

このように，「関心あり」のグループでは，たとえ衣生活に関心があっても男女間には差異があり，ボタンつけにおいて自分でつけられる技能の習得と自分でつけようとする意欲の醸成が必要なことを示している。また，「関心なし」のグループにおいては，男女間に有意差はなかったものの，やはりボタンつけという衣生活行動には大きな違いがあり，自立した衣生活行動が取れるようになるには「関心あり」のグループと同様の対応が必要だと言える。

表１　衣生活の関心とボタンつけを誰がするのかとの関連　　人（%）

	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
自分でつける	9（ 20.5）	45（ 55.6）	6（ 18.8）	8（ 53.3）
家族など自分以外にしてもらう	32（ 72.7）	36（ 44.4）	23（ 71.9）	6（ 40.0）
そのままにしておく	3（ 6.8）	0（ 0.0）	3（ 9.3）	1（ 6.7）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）

（２）衣生活の関心とボタンつけの習得との関連

まず，ボタンつけの習得と衣生活に「関心あり」と「関心なし」の２つのグループ別に男女の違いがあるか否かについて求めた。

その結果は表２に示すように，「関心あり」の男子は，「まあまあじょうずに出来る」と「あまりじょうずに出来ない」というものが，ともに40%代であった。女子では「まあまあじょうずに出来る」が2/3と最も多くの割合を占めた。したがって，「あまりじょうずに出来ない」は1/5に満たない割合であった。この「関心あり」の男女間に違いがあるか否かを明らかにするため，χ^2検定を行ったところ，１%水準で有意差（$\chi^2(3)=14.6, p<0.01$）が認められた。

次に，「関心なし」の男女間，「関心あり」及び「関心なし」とする男子間と女子間についてボタンつけの習得状況をみると，いずれも「関心あり」とする者の方が「大変じょうずに出来る」や「まあまあじょうずに出来る」という者の割合は多い傾向にあった。そこで，差異を確認するためχ^2検定を行ったが，いずれも有意差は認められなかった。

衣生活に関心があるという者においても，ボタンつけがじょうずに出来るかどうかには，男女差が認められたことになる。従って，ボタンつけというような基礎的な技能の習得においても，男女の技能の実態をふまえ，意欲を持って習得できるように一層の工夫が求められる。それには，アクティブ・ラーニングによる学習方法の工夫が必要になろう。

表２　衣生活の関心とボタンつけの習得との関連　　人（%）

	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
大変じょうずに出来る	3（ 6.8）	11（ 13.6）	2（ 6.2）	1（ 6.7）
まあまあじょうずに出来る	18（ 40.9）	54（ 66.7）	12（ 37.5）	9（ 60.0）
あまりじょうずに出来ない	20（ 45.5）	15（ 18.5）	12（ 37.5）	3（ 20.0）
全然出来ない	3（ 6.8）	1（ 1.2）	6（ 18.8）	2（ 13.3）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）

２．まつり縫い

（１）衣生活の関心と被服のほころびやほつれた時の対応の仕方との関連

着用していた被服がほころびたり，ほつれたりした時に誰が補修するのかについて，衣生活に「関心あり」と「関心なし」の２つのグループ別に男女の対応の仕方について求めた。

表３から，「関心あり」とするグループでは男女とも「自分以外」という者が60～70%代で最も多く，次いで男子は「そのままにしておく」が，女子は「自分で直す」という者の順位であった。男女間に違いがあるかどうかをχ^2検定によってみると，有意差は認められなかった。「関心なし」の男女間，「関心あり」と「関心なし」の男子間と女子間にもχ^2検定によって有意差はなく，被服のほころびやほつれた時の対応の仕方と関心とには，ほとんど関連がないと言える。

したがって，被服のほころびやほつれた時の対応は衣生活の関心よりも他の要因，例えば，まつり縫いができるかというような技能面のことが影響しているのかもしれない。今後，さらに検討する必要がある。

表３　衣生活の関心と被服のほころびやほつれた時の対応の仕方との関連　　人（%）

	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
自分で直す	6（ 13.6）	19（ 23.4）	3（ 9.3）	3（ 20.0）
家族など自分以外にしてもらう	31（ 70.5）	51（ 63.0）	25（ 78.2）	9（ 60.0）
そのままにしておく	7（ 15.9）	11（ 13.6）	4（ 12.5）	3（ 20.0）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）

（２）衣生活の関心とまつり縫いの習得との関連

まず，まつり縫いの習得と衣生活に「関心あり」と「関心なし」の２つのグループ別に男女の違いがあるか否かについて求めた。

表４のように，「関心あり」グループの男子は，「あまりじょうずに出来ない」「全然できない」の順位で多く，これらを併せると約3/4を占めた。女子では「まあまあじょうずに出来る」と「あまりじょうずに出来ない」を併せると約3/4になり，女子の方が出来ると自己評価する

者の割合が多かった。両者の違いを確認するため，χ^2検定を行ったところ５％水準で有意差があり（$\chi^2(3)=14.6, p<0.05$），「関心あり」のグループにおいて男女間で差異が認められた。

しかし，「関心なし」の男女間，「関心あり」と「関心なし」の男子間，「関心あり」と「関心なし」の女子の間では，いずれもχ^2検定による有意差は認められなかった。

縫い方の技能の中でまつり縫いは総じて男女とも出来る者が少なく，その影響であろうか，衣生活の関心との関連が極めて希薄だと言える。このことは，まつり縫いそのものへの関心を高める必要があることを示唆していると思われる。例えば，まつり縫いは生活の中で生じるちょっとした服のほつれを直したり，裾上げをしたりする時に役立つことを理解する。また，縫い目を目立たせたくない時に役立つ縫い方で表から縫い目がほとんど見えないよう，織り糸をほんの少しだけすくうのがポイントであることなど縫い方の特徴と活用法を関連づけて理解できるよう学習方法を工夫するとよいと思われる。

表４　衣生活の関心とまつり縫いの習得との関連　　人（%）

	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
大変じょうずに出来る	1（ 2.3）	7（ 8.6）	1（ 3.1）	1（ 6.7）
まあまあじょうずに出来る	10（ 22.7）	36（ 44.4）	6（ 18.8）	5（ 33.3）
あまりじょうずに出来ない	18（ 40.9）	25（ 30.9）	11（ 34.4）	5（ 33.3）
全然出来ない	15（ 34.1）	13（ 16.1）	14（ 43.7）	4（ 26.7）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）

３．衣生活の関心と衣生活観・衣生活行動との関連

高校生が日常の衣生活についてどの様な考え方を持ち，またどんな衣生活行動をとっているのかについて，衣生活の関心との関連を求めた。ここでの衣生活観や衣生活行動は，「高校生の衣生活管理能力形成への性差による課題」[4] において明らかにした被服の購入，着方，手入れ，環境や経済面への配慮などの８項目についてであり，そのような考え方をもっているかどうかと実際に行っている衣生活行動の数値を合わせて求めたものである。

衣生活の「関心あり」のグループでは，男子は衣生活についての明確な考え方を持ったり，行動したりするという数値が「1.0」という者が約1/4を占めて最も多く，これに「2.0」，「3.0」という者を合わせると約4/5とほとんどを占めた。平均値は「2.8」であった。女子では考え方や行動の数値が「3.0」というのが約30%と最も多かった。これに「2.0」あるいは「4.0」という者を加えると，約3/4の者が「2.0～4.0」の範囲に入った。男女別にみた考え方や行動の数値の平均は，男子が「2.8」，女子が「3.1」であった。この「関心あり」という者について，男女間の衣生活観・衣生活行動の数について違いがあるかを明らかにするためについてt検定を行ったところ，５％水準で有意差があり（$t=2.47, p<.05$），男子よりも女子の方が衣生活についての考え方・行動において明確な考え方を持ち積極的に取り組んでいることが窺えた。

「関心なし」のグループでは，男子は考え方や行動の数値が「4.0」という者が最も多く，平均は「2.1」であった。女子では「2.0」というものが最頻値であり，平均値は「2.6」であっ

た。この「関心なし」という者の男女間の違いを t 検定によってみると，１％水準で有意差（$t=4.38, p<0.01$）があり明確な違いが認められた。

このように，衣生活に「関心あり」と「関心なし」という２つのグループ別に考え方や行動をどの様に取っているのかをみると，関心の程度に係らず男女差がみられ，女子の方が積極的に考え，行動していることが窺えた。

表５　衣生活の関心と衣生活観や衣生活行動との関連　　人（%）

考え方・行動の数	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
0.0	1（ 2.3）	0（ 0.0）	2（ 6.2）	0（ 0.0）
1.0	11（ 25.0）	10（ 12.3）	1（ 3.1）	1（ 6.7）
2.0	10（ 22.7）	19（ 23.5）	3（ 9.4）	7（ 46.6）
3.0	10（ 22.7）	25（ 30.8）	4（ 12.6）	4（ 26.7）
4.0	5（ 11.4）	16（ 19.8）	2（ 6.2）	3（ 20.0）
5.0	2（ 4.5）	5（ 3.2）	2（ 6.2）	0（ 0.0）
6.0	3（ 6.9）	6（ 7.4）	0（ 0.0）	0（ 0.0）
7.0	2（ 4.5）	0（ 0.0）	2（ 6.2）	0（ 0.0）
8.0	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）
平均の数値	2.8	3.1	2.1	2.6

４．衣生活の関心と家庭教育との関連

高校生が家族から衣生活についてどの様な教育をどの程度受けているのかと，衣生活の関心との関連を明らかにした。教育の内容は，「高校性の衣生活管理能力形成への性差による課題」[4] と同様の着方，手入れの仕方，選び方，買い方や経済性などに関する８項目を設定したものである。これらの内容について家庭で教育されているかどうかを，教育の数として求め，結果を表６に示した。

「関心あり」のグループで男女とも最も多いのが「1.0」という，家庭教育が１項目についてなされているというもので，50%近くを占めた。次いで「0.0」で家庭教育がなされていないというものであった。これは男女とも約40%を占めた。これら「0.0～1.0」という者が大部分を占め，男女差はほとんど見られなかった。「関心なし」というグループにおいても，「関心あり」という者とほとんど同様の傾向であった。

家庭教育はまさに親を中心として家族によってなされる教育であるので，生徒自身の衣生活の関心とは係わりが希薄であると考えられ，両者の関連性が見られなかったものであろう。

表６　衣生活の関心と家庭教育との関連　　人（%）

教育の数	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
0.0	18（ 40.9）	32（ 39.5）	14（ 43.8）	6（40.0）
1.0	21（ 47.7）	36（ 44.5）	15（ 46.9）	6（40.0）
2.0	3（ 6.8）	6（ 7.4）	2（ 6.2）	3（20.0）
3.0	1（ 2.3）	4（ 4.9）	1（ 3.1）	0（0.0）
4.0	1（ 2.3）	2（ 2.5）	0（ 0.0）	0（0.0）
計	4（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（100.0）
平均の数値	0.8	0.9	0.7	0.8

５．衣生活の関心と学習意欲との関連

衣生活の関心が高い者は，学習意欲も高いのであろうか。このことを明らかにするために両者の関連を求めた。

結果は表７のように，衣生活に「関心あり」の者は，男女とも衣生活について「やや学習したい」というのが過半数を占めて最も多かった。しかし，「もっと学習したい」者は女子に多く，逆に「あまり学習したくない」のは男子に多いというように，男女間の学習意欲には差異が見られた。そこで，両者の違いを確認するため，χ^2検定を行ったところ５%水準で有意差があり（$\chi^2(3)=11.0, p<0.05$），「関心あり」のグループにおいて男女間で明確な差異が認められた。

「関心なし」のグループでは，男女とも最も多いのが「やや学習したい」であり，共に約40%であった。次いで，男子は「あまり学習したくない」，女子では「もっと学習したい」となった。男女間の違いを明らかにするためχ^2検定を行ったが，有意な差は認められなかった。また，「関心あり」と「関心なし」の男子間及び女子間についても差異を明らかにするため，χ^2検定を行った。いずれも有意差は認められなかった。

このことは衣生活に「関心あり」という積極的な態度を示す者でも，その学習意欲には男女差が認められるということである。兒玉らの調査[7]でも同様の結果が見られており，この違いを踏まえ，衣生活の関心に応じて，積極的に取り組めるよう教材や指導法の工夫を行うことによって，衣生活管理能力の形成を図ることが課題となる。

表７　学習意欲　　人（%）

	関心あり		関心なし	
	男子	女子	男子	女子
もっと学習したい	4（　9.1）	20（ 24.7）	1（　3.1）	4（ 26.7）
やや学習したい	23（ 52.3）	49（ 60.5）	14（ 43.7）	6（ 40.0）
あまり学習したくない	15（ 34.1）	11（ 13.6）	10（ 31.3）	3（ 20.0）
全く学習したくない	2（　4.5）	1（　1.2）	7（ 21.9）	2（ 13.3）
計	44（100.0）	81（100.0）	32（100.0）	15（ 13.3）

Ⅳ　まとめ

家庭科の授業において生徒の知識・理解の質を高め，資質・能力を育むには，「主体的・対話的で深い学び」が求められる。このアクティブ・ラーニングによる学びの実現には，生徒が自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど，興味・関心を生かした学習を工夫することが重要である。本稿ではまず衣生活の関心に焦点をあて，衣生活の関心の程度が衣生活観や衣生活行動にどのような性差をもたらすのかを，特に性差に着目して明らかにし，衣生活の関心や学習意欲を高めるための方策を検討することを目的とした。

その結果，衣生活の関心の程度によって，衣生活観や衣生活行動に差異が見られた。すなわち，男子よりも女子の方が衣生活の関心は高い傾向にあり，関心のある者の方が明確な考え方を持ち積極的に取り組んでいることが窺えた。

従って，衣生活の関心に応じて，積極的に取り組めるよう教材や指導法の工夫を行うことによって，衣生活管理能力の形成を図ることが課題となる。

参考文献

１）中間美砂子編著（2006）家庭科への参加型アクション志向の学習の導入　大修館書店 pp.12-14.

２）松下佳代編著（2016）ディープ・アクティブラーニング　大学授業を進化させるために勁草書房　pp.15-19.

３）日本家庭科教育学会中国地区会編（2017）『アクティブラーニングを活かした家庭科の授業開発』　教育図書　p. 6 .

４）多々納道子・平井早苗・鎌野育代（2017）「高校生の衣生活管理能力形成への性差による課題」島根大学教育学部紀要（51）（教育科学）pp.33-40.

５）櫻井茂男（2017）『自立的な学習意欲の心理学』　誠信書房　p.14.

６）中村祐治・堀内かおる編著（2006）『これならできる 授業が変わる評価の実際』開隆堂 pp.90-91.

７）兒玉裕巳・石隈利紀・外山美樹（2017）「中学・高校における学習の態度の認知・情操・行動間の関連および学校段階間の差異」筑波大学心理学研究（53）pp.33-40.